

我が初体験の告白 <第二弾>

◆第三章:

病室は四人部屋で誰でも知っているように、ひとつひとつのベッドがカーテンで区切られている。



しかしカーテンの上部はメッシュになっているので、通気性と採光という点では配慮されていると言える。幸い窓際のベッドだったため明るさと景色を見る楽しみがあるという点ではよかったが、午後から夕方にかけて暑くなるという欠点はあった。

カーテンを開いて開放的に過ごそうという人もいるが、そうしない人の方が多いようだ。

カーテンを閉めたままで閉鎖的に暮らそうとしても、巡回に来た医師や看護師との会話や見舞いに来た家族や友人との会話の内容は他の三人のベッドからは聞こうと思わなくても聞こえてきてしまう。皆が聞こえないふりをしていることで平和が保たれているにすぎないという不思議な世界だ。

入院手続きが済んで自分のベッドに着地すると、病院の事務手続きの一環として、看護師が患者のプロフィール情報を確認しに来る。様々な個人情報や個人の事情、入院の経緯・・・対面で確認しながらパソコンに入力していく。カーテン越しに聞き耳を立てていると、その人の様子が見えてくる。

もし、カーテンの向こうでICレコーダーに録音している人がいたら・・・?

隣の男性は77, 8才、ゴルフで足首を骨折したと言う。時々様子を見に来る奥さんとの会話を聞いていると、「偉そうな態度」の語り口が目立つ。動けなくなった旦那に「少しぐらい素直になったら?」と言いたげな奥さんの遠回しなセリフの抵抗がわからない様子。それと、どうやら高血圧らしい。

向かいのベッドの人は顔を合せても会釈ひとつしない。ところが看護師を呼んで話をしている時の声は昼夜をかまわずドスの聞いた大きな声でうるさい。看護師との会話を盗み聞きした感じだと足首のあたりを複雑に骨折して肉が露出したりしている状況らしく、ベッドで診察や治療・処置が頻繁に必要な状況らしい。おまけに高血圧・高脂血症・尿酸値関係の薬を飲んでいる人らしい。家族だか友人だかわからないがジュースやコーラを持って来させている様子だし、消灯になっても深夜までPCでゲームをやっているような音がする。数日後別な部屋に移って行った。

その横のベッドは中学三年生、肩の骨折とのことだが両親・祖父母総動員で入院。会話内容を聞いていると母親が喋りすぎ・手の出しすぎ・先回りして騒ぎすぎという感じがする。

病院の食事のメニューは、基本的には朝食はパン食で昼と夜が米食になっているらしい。昼食を重たく食べるようになってきているが、夕食を済ませたら寝るだけという患者生活のリズムに叶っているようだ。例外メニューは、金曜日の朝食は「和の食事」と決まっていて米飯に納豆・鮭・海苔。この日だけは昼食はサンドイッチになる。

ある日の昼食はスパゲティミートソース。茹でたスパゲティが井に入っていて、別の小井のような器にミートソースが入っていた。どういう道具を使って、どういう手順で食べるべきか、しばし悩んだ。

ゴルフで骨折のおじさんの素性が段々わかってきた。激しい鼾の後で間欠的に静寂が訪れ、その後しばらくすると「ガガッ」という轟音を発する。つまり、本人が自覚しているかどうかはわからないが明らかに睡眠時無呼吸症候群。ある朝看護師の巡回の時に「良く眠れていま



すか？」と聞かれたので、「あまり・・・」と口を濁した。すると「痛みでもあったの?」。やむなく隣のカーテンを指さして隣のゼスチャーをしたらわかってくれた。そして看護師の耳元で（小さな声で）「睡眠時無呼吸症候群の重症！」と言ったら、「あら・・・」

このおじさん、入院にあたって大急ぎでスマホを買ってきたのだが使い方がわかっていない。奥さんの方がスマホ先輩らしいが、奥さんには素直に聞くことができないらしい。そして遂に大胆な行動に出た。ナースコールボタンを押して、駆けつけた看護師にスマホの使い方を聞く始末。非常識な患者だ。

朝昼晩の食事の前にお茶を注ぎに来てくれるのはありがたいことだが、お茶が来てから一時間後に食事が来るので、食事の時にはもう冷めてしまっている。

よく観察してみると・・・、茶碗にお茶を注いだ後で蓋をきちんと閉める人、半端に蓋を乗せるだけの人、蓋を乗せ忘れる人など様々。また、お茶を持ってきた時に開けたカーテンをきちんと閉める人、適当に閉める人、開けたまま行ってしまう人、これまた様々。

ゴルフで骨折のおじさんは毎晩消灯時刻を過ぎても照明を点けてテレビを見ている。ある晩のこと、ここで黙っていてもは為にならじと思ひ、隣のベッドまで車椅子で移動して「規則で決まっていることなので、消灯後は消して下さい」と言ってやった。すると「あ、そうなの?」という反応。

80才近い大の大人が規則を守らず、向かいのベッドの中学生がさぞ困っていたことだろう。

一件落着で暗闇と静寂を回復して眠りについたら・・・。深夜1時過ぎ頃だっただろうか、空室の隣の前のベッドが騒々しくなって目が覚めた。ベッドを搬出して別なベッドを搬入し、しばらくすると急患が入ってきた様子。例によってパソコンを持ってきた看護師がクライアント情報を収集すべくインタビューを始めた。どうやら麻酔から覚醒していないようで情報収集は不可能と判断して中断。

再び静寂が戻ってきて、今度こそ眠りに入りたいと思ひて瞑目したら・・・。

ゴルフのおじさんの猛烈な騒ぎが始まった。素人の耳にも、完全に呼吸が停止していることがわかるような睡眠時無呼吸。この人、昼間も寝ているが、恐らくきちんと眠れていないので一日中寝不足なのだろう。二日に一度ぐらい来訪する奥さんは、果たしてこのことを知っているのだろうか？

アクシデントが三件も続き、しっかり眠れていない感じの夜明けだった。

朝になってさらに驚くようなことがわかった。深夜の急患さんを見に来た看護師の声を聞いてびっくり。「あら、まだお酒臭い」

リハビリ病棟へ移ることになり、これまでに会った隣人とはお別れすることになった。

新しい病室での向かいのベッドの人は、(例によってカーテン越しの盗聴によれば)通勤の途中で会社近くの坂道で足を滑らせて転倒して股裂き状態になり、足首の他に辛うじて着地した膝の周辺を複雑に骨折したと言う。労災の適用を受けることになっているようだが、その手続きを自分でベッドから携帯電話でやっている。おまけにこの人は高血圧で糖尿病、インシュリンの注射をしている。

隣の部屋は女性部屋で、聞こえてくるキーワードは、「交通事故」「股関節骨折または人工股関節手術」「大腿骨骨折」などなど。

リハビリ病棟は体を動かすことができる人ばかりなので、廊下は自主トレーニングをする人が多いだろうと思ひきや、昼間は廊下にお喋りの声が響き渡る。特に女性はお喋り(交流?)が多いようだが、男性の声はあまり聞こえない。どのベッドもカーテンが閉ざされていて寝息や騒ぎが聞こえる。

一方、女性の中にも「群れを作る人」と「群れを作らない人」がいるようで面白い。

病棟の廊下を自主トレーニングの場として使い始めたら、すれ違いざまに言葉を交わす内にかなりの人と知り合いになることができた。「熱心にリハビリをしていますね」と聞かれることが多くなってきた。



「リハビリとリハビリの間の時間が長いと、教わったことを忘れてしまうので・・・」
「リハビリって、体が覚えなければダメなようだし、脳が体を動かしてくれている訳だし・・・」
それから数日後あたりから廊下で自主トレーニングする人が増えてきた。

左隣の人と左前の方はリハビリと食事の時以外はずっと横臥したままでいて、ほぼ寝息をたてている。それだけ容態が思わしくないのだろうか。にも関わらず左隣の方は今日退院して、兄が世話してくれた別の施設に入ると言っている。

左前の方は視線が合う度に挨拶を仕掛けるが全く応答がない。他人との接触を拒む表情をしている。この方は朝食が済んで30分も経たないのにもう猛烈な鼾。昨晚一晩中かきまくったのに・・・。
この人も睡眠時無呼吸の気がある。

毎朝行われる定例の行事。「XXさん、おしっことうんこの回数は？」夜勤あけの看護師がする仕事になっているようで、6時から6時半頃に来ることが多い。次に回ってくるのは「血圧と体温測定」、朝食が済むと「全部食べましたか？体調はどうですか？」

中に一人仕事熱心な看護師が居て、5時45分頃に「おしっことうんこ・・・」と聞きに来る。一方ベッドの上ではまだ朝が来ていない人もいたので、この声で目が覚めてトンチンカンな受け答えをする人も居て、聞いていると面白い。

看護師が引き上げた後で、カーテンの奥から独り言が聞こえた。

「おしっことうんこのお婆さん、気合いが入っているのはわかるけど、早すぎるよ」

左前の寝たきりおじさんと接触に成功。両足の踵を骨折、片方はボルトで固定、もう片方はギプスで固定とのこと。4月末から入院しているとのこと、「大先輩ですね」と煽てたら喜んでた。この会話をきっかけに、時々雑談をするようになった。笑顔のあるごく普通のおじさんだった。

「リハビリで教わったことは自分で復習した方が良いみたいですよ」とアドバイスしたら、翌日から廊下に出てくるようになった。

隣の病室の若い女性二人と廊下で自主トレーニング中に立ち話。

Aさんは左膝下と大腿部を骨折し、右の股関節にもひび。3月末に入院したので私が一番古手かもしれないと言っていた。ようやく片松葉杖の歩行ができるようになり、目下リハビリで両足立ちを訓練中。Bさんは、交通事故で乗用車の車輪が外れて飛んできて、歩行中に直撃を受けたそうで、左足を複数箇所骨折とのこと。膝の治療の関係上、股関節の骨を削り取って骨移植をしたので、股関節までがリハビリ対象になってしまったとのこと。

右膝人工関節手術ぐらいで驚いては申し訳ないような周囲の状況に、いささか驚いてしまった。

長女が見舞いに来てくれたので、2階の談話スペースでコーヒーを飲みながら雑談。生憎談話スペースが混雑していたため、一人の老婆が座っているテーブルに相席させていただいた。すると老婆曰く

「一緒に座らせていただきありがとうございます。私こちら側の耳が遠いので聞こえていませんから気にしないで喋りいただいて大丈夫ですよ」と。

丁重に礼を述べて雑談開始。手術前後の状況・現在の状況・リハビリの予定などなど話をしている内に、話は深入りして行き、運動と脳との関係、条件反射の話、脳とリハビリの関係、マッサージ効果の話・・・。

一時して、老婆は帰宅の途に着くらしく腰を上げて曰く

「何だか、リハビリに関する役立つ話を沢山聞かせて貰って、ありがとうございます」
歩き出した老婆に軽い会釈を返した後で、顔を見合わせて「えっ、何これ？」



空いていた隣のベッドに新しい人が移ってきた。声をかけてみたら、左足の膝下と脛骨・腓骨の中央部の三カ所骨折。現在は松葉杖歩行で、リハビリで平行棒歩行訓練が始まったばかり。午後のリハビリが終わって、談話スペースで玄米茶を飲んでいたら、隣に70才前後の女性が座った。聞いてみると、転んで右の手首と手の甲のダブル骨折だという。右利きで、左手など使うことは全くなかったの、食事は大変、字は書けない、トイレも大変・・・。この女性に意味深いお言葉をいただいた。「あなた、手じゃなくて良かったですね」

向かいのベッドのインシュリンを打っている人は相変わらず無愛想。病室内や廊下やトイレの入口などですれ違うことが多くなってきたので、こちらから挨拶をするのだが全く応答（反応）がなく「あんた誰？」という表情。

カーテン越しの盗聴では、看護師さんとはかなり砕けた会話もしているのに不思議だ。「利害関係がない人とは繋がりを持たない」という強い信念を持っているのだろうか。

自主トレーニングでよくすれ違う夢子さん（とっさのイメージで勝手に名を付けた）は、いつもにこやかに話しかけてくる。人工股関節手術をしたようだが、毎日自主的に歩行訓練をやっていて、日に日に円滑な歩き方をマスターしている。弥勒菩薩のような柔らかな笑顔に惹かれて時々立ち話をするようになった。

隣の部屋のブラジル人のおばさん（日本人と結婚したようで名字は日本名）は、毎朝病棟はずれの明るい非常口の前でお祈りをしている。ポルトガル語らしく、何を言っているのかは全く解らない。ある日廊下ですれ違った時に、おばさんが小声で歌う歌が聞こえてきた。

「Hey Jude, don't make it bad. Take a sad song and make it better・・・・・・・・・・」

廊下の端で折り返してきて再びすれ違う時に、「Hey Jude, don't be afraid・・・・・・・・・・」と低い声で返歌してみたら、彼女の足が止まった。

片言ながら流暢な日本語で、「ヘイジュード好き？ 私一番好きな歌」。これがきっかけで時々雑談をするようになった。変形性膝関節症でしかも極度のX脚のため、人工関節手術と骨切手術をしたと言う。

「曲がっていた脚を真っ直ぐにして貰った、きれいに歩けるようになりたいから、リハビリで頑張っている」とのことだった。「Hey Jude」の歌詞が彼女のガンバリのエネルギー源になっているようだ。



病院には看護師・薬剤師・ヘルパー・パート職員など様々な人が我々患者に対応してくれているが、

その語り口によりいくつか大別できる。「全患者に幼児語で接する人」「唄うような語り口の人」

「明るく愉快そうに語りかけてくる人」「毅然とした語り口の人」などなど。中には患者に合わせてこれらを使い分ける人もいる。高齢のしかも認知症などの症状を伴っている患者が増えているせいで、結果的に幼児語を使用する場面が増えているようだ。それだけ大変な仕事を担って下さっているという感じがするが、患者側の気持ちから言うと、無差別に幼児語で語りかけられるのは、あまり快適なものではないと思うが・・・。

向かいのベッドの人は高血圧で薬を飲んでいる人らしい。ある朝、起床時に鼻血が出たことから看護師の動きが多くなってきた。血圧を測ったら190/110で何度も計り直していた。どうやら高血圧で他の病院に通院治療中だった上に血液サラサラ薬を飲んでいて、インシュリンも打っていて、体重95Kg、大変な条件をいくつも持っている骨折のようだ。

廊下でよく立ち話をするおばちゃんが、満面の笑みで話しかけてきた。「私、今日退院します」

大腿骨骨折で5月21日に入院、手術はなく固定してくっつけただけで済んだとのことだった。かなりシャンとした歩き方になっていた。

人工股関節手術の夢子さんも6月30日に退院とのこと。まだ縫合部周辺の筋肉が思うように動かない日もあるようだが、日々歩き方が柔らかくなってきているのがわかる。

「主人の77才の誕生日に間に合ってよかった」と言っていた。失礼ながらお歳を伺ったら、私と同年齢だった。

一ヶ月弱入院していると、色々な出来事に遭遇し、色々なことを知り、色々な人と出会った。

腫れあがって曲がらない右膝を見て、この先ちゃんと回復するのかなと心配になることもありはしたが、日に日に快方に向かって行く我が体の力を見て勇気づけられた。

病院内を観察してみると、複雑な故障や複雑な手術を余儀なくされた患者が数多く存在することが見えてきた。また、複雑な体の事情ゆえに治療やリハビリが思うように進まない人も少なくない。

過酷な状況に置かれている人達から見れば、右膝関節の手術だけで済んだ自分はかなりラッキーな部類に入るのかも・・・と思い始めたら、力が湧いてきたような気がした。

以上